

事例番号 14

Keywords: 知的障害, 自閉症, 要求を伝える, 一貫した指導, 教員間の共通理解, 障害に基づく困難の改善

(1) 小学部 1 年生を対象とした VOCA の導入段階における配慮事項の検討

— 教室から飛び出す行動を改善するために VOCA を活用した事例をとおして —

(2) 事例の対象となる児童生徒について

小学部 1 年 男子 知的障害 自閉症

KIDS (乳幼児発達スケール) より

運動 1:8 操作 1:2 理解言語 0:8 表出言語 0:4 概念 1:4

社会性 (対子ども) 1:2 社会性 (対大人) 0:4 しつけ 2:0 食事 1:2

(3) 使用する機器 (支援機器) 名称と特長

① 支援機器の名称

「パートナー／フォー」(VOCA)

② 特長

4 個のメッセージを録音できる VOCA で、ボタン間に枠があり境界が明確である。また、ボタン面が少し斜めになっており、オーバーレイシートに印刷された写真が見やすいのも特長である。

(4) 使用した機器を選定した理由

対象児は、小学部入学当初、興味のある場所に勝手に飛び出していくことが多くあった。指導者の手を引いたり、手を合わせたりして動作で要求することがあるものの、無言語のため伝えたい内容が分かりにくく、伝わらないと泣いて床に頭をぶつけるなどの自傷行為に及ぶこともあった。また、アイスのふたやラミネートされた写真にこだわりを示し、学習中でも手放せない状態であったため、写真カードを指導者に手渡すことなどのコミュニケーション行動を学習するのが困難な状況であった。そこで、より操作が簡単な VOCA であれば、押せば状況が変化するという因果関係が学びやすいのではないかという理由から、行き先などの要求を伝えるために VOCA (パートナー／フォー) を活用することにした。パートナー／フォーは、ボタンに枠があり、ボタンとボタンの間の境界がより明確であること、学校内に備品としてあったこともこの機器を選定した理由である。

(5) 選定のプロセス

本校小学部の備品としてあった VOCA の中から対象児が扱いやすいものを選んだ。行動観察からよく行く場所をリストアップして、「プレイルーム」「トイレ」「プレイヤード」「休憩場所」の四つの場所の写真をボタンにはり、音声登録した。VOCA は、対象児のトランジションエリア (スケジュールが提示されており、活動の切り替えを行う場所) に設置し、指導の手続きを教員間で共通理解して指導にあたった。

(6) 個別の指導計画と個別の教育支援計画

4 月時点の個別の共働支援計画 (個別の指導計画) には、自立活動の目標として以下の内容を計画し、保護者に説明を行った。

目標	給食のとき、おかわりの要求を伝えることができる。
手立て	少なめに配膳すること、直接行動で欲しい物を手にしようとする場合は、手を

	添えてカードなどのコミュニケーション手段を使うことを教える。
--	--------------------------------

入学当初は実態把握が十分ではなくて、本事例に関する内容の記載はなかったが、実態の変化に応じて目標や手立てを柔軟に変更していくことが大切と考え、要求伝達のための指導場を広げることとした。給食場面での指導と並行して、休憩時間に行き先を伝えることも目標に追加した。

目標	給食や休憩時間に、指導者に要求を伝えることができる。
手立て	少なめに配膳すること、直接、欲しい物を手にしようとすることや、場所に行こうとするときには、手を添えて写真カードや VOCA を使うことを教える。

(7) 指導の内容

指導の手続きとしては、休憩時間に勝手に教室を出て行こうするときには、VOCA が置かれてある場所に連れて行き、該当するボタンを押すことを促した。行き先が予測される場合は、該当するボタン以外を手で隠すようにし、押し間違えがないようにした。

<指導の経過>

○4月中旬～5月初旬

- ・VOCA のボタンにはった写真カードで遊びたくて、はがそうとすることが多かった。
- ・音声のフィードバックがあることが分かってくると、音の反応を楽しむためにコミュニケーションとは無関係に繰り返し押しするようになった。学習の妨げにもなることがあったので、コミュニケーション場面以外では、スイッチを切ることや VOCA を見えなくするなどの対応をせざるを得なかった。
- ・飛び出しの前兆が行動観察により予測できるようになってくると、行きかけた瞬間を見計らい、VOCA の前に連れてきて、VOCA を押すように促した。4分割のボタンを正しく選択できることは少なかったため、その都度、訂正するようにした。

○5月初旬～5月下旬

- ・飛び出しの前に、自ら VOCA を押しにくる様子が見られるようになった。まだ意思に合った選択はできず、とりあえずどれかを押してみるという様子であったが、飛び出しは減ってきた。
- ・依然として、VOCA を音の出るおもちゃとして遊ぶ様子が見られる。



図4-14-1 VOCA を操作している様子

○6月初旬～7月

- ・行き先を正しく選択でき、自発的に VOCA を押して伝えることが多くなった。VOCA を押すことで要求がかなうことが分かってくると要求回数も多くなり、要求に応えられない場面も出てきた。そのため、泣いて怒ることがあった。スケジュールを使って、いつできるのか、今は

何をすべきなのかを伝え、やり取りをとおして行動を調整する力を付けていくことも課題として浮上してきた。

・VOCA がない教室でも、クレーン動作での要求が見られるようになってきたので、いつでも意思を伝えることができるように写真カードを携帯するようにした。クレーン動作でどこかに行きたいことを表現しようとしたときに、携帯している写真カードを見せるようにした。携帯している写真カードを外して感触遊びに用いることは多いものの、理解できる写真も増え、コミュニケーションツールとしても活用できるようになっている。

(8) 支援機器の使用効果あるいは、指導の効果と支援機器の評価

押すと音声のフィードバックがすぐに返ってくる VOCA は、対象児にとって興味をもてる支援機器であった。操作が簡単であるため、コミュニケーションに必要な動きを習得しやすく、対象児が伝えたいと思った瞬間を指導場面としてタイミングよくとらえることができた。結果、指導の手続きが複雑になることなく、教師に指示されて押すのではなく、自発的に押すという行動を引き出しやすかったと考える。導入段階（指導初期）には、コミュニケーション以外の目的で音の反応を楽しむために繰り返し押すといった行動が見られ、時には学習の妨げになることもあった。コミュニケーションツールとしての本来の目的を理解できるようになるまでには、上記のような行動が見られ、VOCA の使用を断念するケースも考えられる。それを避けるためには、一貫した指導の手続きを教員間で共通理解し、一定期間繰り返す必要があると考える。また、客観的なデータはないが、コミュニケーションの目的で VOCA を利用できるようになってくると、反応を楽しむために押す回数が減ってくることは実感として感じている。

(9) まとめと今後の課題

まとめとして本事例の指導経過から見出された、VOCA 導入段階における配慮点と今後の課題を挙げる。

<導入段階における配慮点>

- ・VOCA は操作が簡単で反応がすぐに得られるので因果関係を学びやすい。そのため、コミュニケーション場面以外の目的で繰り返し押す行動が出現する可能性があることを前提としておく。
- ・VOCA の使い方をどのように教えるのか、間違った使い方をしたときにどのように修正するのかなどの指導の手続きを教員間で共通理解する。
- ・実態の変化に応じて個別の指導計画を見直し、柔軟に目標、手立てを修正する。

<今後の課題>

- ・VOCA を押すと要求がかなうことが分かってくると要求回数が増えてくるので、スケジュールの指導も並行して、要求がいつ実現できるのか、今は何をすべきなのかといった見通しをもち行動を調整することも教える。
- ・VOCA だけでなく、写真カードや動作などのコミュニケーション手段も評価をもとに検討し、いつでもコミュニケーションをとることができるように環境を整えていく。

※ 本事例（特別支援教育教材ポータルサイト掲載事例）は、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所「特別支援学校におけるアシスティブ・テクノロジーの活用ケースブックー49例の活用事例を中心に学ぶ導入、個別の指導計画、そして評価の方法ー」（2012/3）に記載された内容である。

